

イラストレイテッド泌尿器科手術 図脳で覚える術式とチェックポイント

加藤晴朗 著

＜書評者＞ 木原和徳（東京医科歯科大学大学院泌尿器科学教授）

加藤晴朗先生の『イラストレイテッド泌尿器科手術——図脳で覚える術式とチェックポイント』が刊行された。以前よりご本人から聞いていた加藤先生自身の1000点以上におよぶイラストで解説した手術書である。本書で言う加藤流の極意は、「手術は暗記」である。「優秀な外科医に求められるものを身につける究極の方法は、暗記である」「くどいようだが、手術は暗記である」。気持ちよく断言している。一人当たりの症例数の少ない日本において、どのようにして優れた執刀医になるか、いつも考え続けた術者が到達した「境地」である。日本とは比較にならないほど多数の膀胱全摘除を経験できるエジプトでの研修体験が大きな基礎となっている。

加藤先生の言う「図脳」とは、図に基づいた頭脳の働きを指しているようである。手術を説明するには（「暗記」してもらうには）、図が最優秀との意であろう。本書は泌尿器科の重要手術をほぼ網羅しており、次の項目から構成されている。①膀胱の手術、②泌尿器

科手術に必要な各種アプローチ、③前立腺手術、④陰茎・陰囊・尿道の手術、⑤女性および小児泌尿器の手術、⑥尿路再建術、付録）マンスーラ～エジプトの泌尿器疾患と手術、である。先生自身の巧みな、解剖をよく理解した、うまい絵で、「美しい手術が優れた手術」という先生の思いを表しながら、代表的な泌尿器科手術の手順と手技のポイントが詳細に解説されている。膀胱の手術には特に力が込められている。ミニマム創手術にも言及がある（感謝）。絵を描くこと自体が手術のトレーニング（加藤流では暗記の訓練）になることを、無言のうちに伝えている。

今は、腹腔鏡手術がその口火を切った「手術の革命」の真最中である。年毎に新しい手術の概念が登場するように感じられる。「手術の傷跡もまったくなく、翌日には退院できる大手術」が現実のものになろうとしている。ただ、このような手術に到達するための土台、基本はいつの時代も変わらない。無数の先達が丹精して築き上げてきた開放手術である。「定型

的な手術を暗記してしまえば、応用問題も可能であるし、そこから自分の境地も開けてくる」と著者が言うように、本書はこの土台の解説書であるとも言える。十分な土台を身につけることが、手術がうまくなる王道である。その延長上に、新しいテクノロジーと相まって創造的な世界が開けてくる。若い加藤先生が提示してくれたこの優れたテキストで自分の手術を顧みてみることは、泌尿器科医、特に若い泌尿器科医にとって、優れた手術トレーニングになるであろう。

本書は、「手術とは何だろう」、「どうしたらうまくなるだろう」を加藤流に伝える本である。テクニクの解説から溢れる、手術に対する熱い思いに触れてほしい。患者さんに「手術が益になるか、不利益になるか」、まさに術者にかかっている。外科系の医療崩壊が危惧される今日、「天気晴朗なれども波高し」と士気を鼓舞した有名な海戦の言葉があるが、この本を手にとって晴朗先生に鼓舞される泌尿器科医がひとりでも増えることを願っている。

●A4 頁400 2007年
定価17,850円
（本体17,000円＋税5%）
[ISBN978-4-260-00398-8]
医学書院刊